

T・E・ヒュームとバートランド・ラッセル

兼 武 進

る。

年譜によれば、第一次世界大戦の勃発と同時に一兵卒として志願入隊したT・E・ヒュームは、一九一五年の春先、肩の貫通銃創で本国に送還され、ウィンブルドンの病院で治療を受ける。退院後、ロンドンなどで日を過ごし、一九一六年の三月にはふたたび念願の砲兵隊に士官として入隊する。この数ヶ月の間、友人のほとんどを戦場に送り出してゐる彼はひたすら著述に励んだ。

この期間に生れた著作には、翻訳を別とすれば、ふたつの系統があった。ひとつは、彼の新しい世界観の粗描を試みた「T・E・Hのノートブック」、つまり、後にハーバート・リード編集『思索集』に「ヒューマニズムと宗教的態度」として収録される未完の論文であり、もうひとつは、第一次世界大戦への英国の参戦を擁護する一連の時評である。⁽¹⁾ この二系統の著述において、部分的に評価はされてゐるものの、激しい批判を浴びせられてゐるのがバートランド・ラッセルであ

一八八三年生れのヒュームから見れば、バートランド・ラッセルは十一歳ほど年長に当る。一九〇一年、ヒュームがケンブリッジ大学に入学し、数学を学びはじめたころ、同じやうにケンブリッジ大学で数学と数理哲学を勉強して卒業してゐたラッセルは、幾何学の基礎論なども発表し、数学と論理学の關係の画期的な研究に没頭してゐた。さうして、一九一五年から一九一六年にかけて、軍役についたヒュームが負傷して帰還してゐたころには、バートランド・ラッセルはすでに「人間の頭脳の最高の傑作のひとつ」⁽²⁾といはれる『プリンキピア・マテマティカ』をはじめ、数々の哲学論文を発表して、ケンブリッジ大学のフェロウの地位を約束されてゐる一方、活潑な反戦・平和主義の運動を展開してゐた。そのラッセルにヒュームは激烈な批判を加へたのだつた。ラッセルも二度、応酬した。

ヒュームが生前に公にした著述として「T・E・Hのノートブック」と一連の時評は最後のものである。書かれた時期ははじめに触れ

たとわりで、そのせゐか、ヒュームの論調には凄絶な緊迫感が漲つてゐる。本稿では、そのなかからバートランド・ラッセルに対する批判の部分を取上げ、なにごと問題とされ、どのやうに批判されてゐるかを検討してみる。これは、ヒューム最晩年の思想を具体的に理解するうへで有意義であらうと思はれる。

二

「ヒューマニズムと宗教的態度」のなかで、ヒュームは「純粹」哲学と「世界観」哲学との絶対的分離を主張してゐる。このやうな分離はフッサールやデイルタイから学んだものとされてゐるが、英国においてこの分離の必要を明確に主張してゐる哲学者として、ヒュームはバートランド・ラッセルの名前を挙げ、つぎのやうなラッセルからの抜書きを「擬似カテゴリー」の項に記してゐる。

ラッセル…「哲学が知的な刺戟をより多く受けるべきであるのは科学からであつて、宗教や倫理からではない」ラッセルは、その価値がまつたぐといつてよいほど第二の要素（宗教や倫理。引用者註）にある哲学者としてスピノザの名前を挙げる。「われわれが彼を読むのは、世界の本質についての形而上学的理論を期待してゐるからではない。彼の所説で価値があるのは、世界に対する新しい感じ方が教示されてゐる部分である」ラッセルの結論は「哲学に科学的方法を採用すれば、その結果としてわれわれは、

伝統的哲学に見られる一層野心的で、また人間にとつて興味深くもある、もろもろの問題を解決するといふ希望を放棄せざるを得なくなる」⁽⁴⁾

これは、語句に若干の異同や省略はあるものの、バートランド・ラッセルが一九一四年にオックスフォード大学で行つたハーバート・スペンサー講義「哲学における科学的方法について」からの引用である。「伝統的哲学に見られる一層野心的で、また人間にとつて興味深くもある、もろもろの問題」とは「宗教や倫理」と解釈するのが妥当であらう。ヒュームはこの引用につづいて、世界観の哲学と科学的哲学の峻別を主張するフッサールからの引用も併記した後、「純粹に『科学的』な哲学の可能であることと、そのやうな哲学と『世界観』とは明確に分離される必要のあることとに關してふたりがいつてゐることに、私はまつたく賛同するものであるが、このノートブックで私のいはんとするところに照せば、私はこの分離のもうひとつの局面のほうを強調しないわけにはいかない⁽⁵⁾」と書いてゐる。ヒュームにいはせれば、彼らが両者の分離を説くのは、哲学の科学的要素を世界観の悪しき影響から救出するのが主たる目的なのである。しかし、世界観は本来、哲学とはなんの関りもない別箇の主題に属すると思ふゆゑに、自分は、両者の分離の必要を主張するのだといふ。このやうに關心の持ち方の違ふヒュームに、それでは、このふたりはどのやうに映つてゐるのだらうか。

私の見るところ、純粹に科学的な哲学の本質に関する彼らの所説は申し分のないものであるが、「世界観」の本質に関する所説となると、著しく満足の行かないものとなる。科学的要素については、きわめて明確な説明を聞けば、他の要素についても同様に明確な説明が聞けるものと期待する。ところが、それが聞けない。

ラッセル氏が「自由人の信仰」のなかでこの主題について述べてゐるところなどは陳腐きはまりないものであり、それがまた、虚偽と感傷に満ちたレトリックで固めた、辟易するやうな文章で書かれてゐるので、私は、ここにそれを取上げて検討するだけの忍耐力を持合せてゐない。⁽⁶⁾

ここでのラッセルに対するヒュームの評価は、ふたつに分れてゐる。ひとつは、ラッセルの「純粹に科学的な哲学」についての説明は明確であつて、間然するところがないといふ肯定的な評価であり、もうひとつは、そのラッセルの「世界観」哲学は、内容にせよ文体にせよ、陳腐かつ愚劣であるといふ否定的な評価である。しかし、このやうな評価が正鵠を射てゐるかどうかは問題のあるところだと思はれる。

まづ「純粹に科学的な哲学」についてのラッセルの説明であるが、残念ながら私には、それが哲学の議論として完璧なものであるかどうかを判断するだけの専門的な知識がない。それでも、ヒュームのラッ

セル理解といふ観点から見るとき、ラッセルにあつて重要な視座でありながらヒュームが軽視してゐる点がふたつあるやうに思はれる。それは、第一に、ラッセルは確かにいはゆる哲学のなかの「純粹に科学的」な要素と「世界観」的な要素とを分離してゐるが、そのことはただちに思考における「世界観」的な要素を全面的に否定することではないといふ点であり、第二に、「純粹に科学的な哲学」の客観的な方法はかならずしも、この方法によつて得られた認識の究極的真理性を保証するものではないといふ点である。

第一の点についていへば、ラッセルの趣旨は、「純粹に科学的な哲学」といふ観点に立つたときに「世界観」的な要素が探求を阻碍する要因になるといふことであつて、ラッセル自身は思考といふ営為における「世界観」的な要素の価値を否定してはゐないはずである。ヒュームがそこから引用してゐる「哲学における科学的方法について」のなかでも、ラッセルは「倫理的な観念によつて刺激を受ける類の哲学がその本来の領分に留つてゐるかぎり、私はその重要性や価値を否定するものではない」といひ、「例へば、スピノザの倫理的な著作などは私には最高の重要性を持つものと思はれる」とまで評価してゐる。⁽⁷⁾ラッセルは、この講演と同じ年に雑誌に発表した「神秘主義と論理」といふ論文のなかでも、「神秘主義」ないしは「世界観」的な哲学の重要性をつぎのやうに強調してゐる。

神秘主義も極限まで行くと、私には誤れるものと思はれるのであ

るが、しかしながら、適切な抑制さへ忘れなければ、神秘的な感覚から学ぶべき智慧の要素はあるのであつて、それは他のどのやうな方法によつても得られないものと思はれる。もしこのことが正しいとすれば、神秘主義は、世界についての信条としては問題であるとしても、生に対する態度としては評価されて然るべきであらう。⁽⁸⁾

見られるやうに、ラッセルの立場はあくまで、「純粹に科学的」な分野の探求に当つては「世界観」的な要素を除去するといふことであつて、「世界観」的な哲学についてもラッセルなりに評価はあるのである。このことはヒュームも十分に認識してゐるやうであるが、さうであれば、この節の冒頭に掲げたヒュームのラッセルからの拔萃は、「伝統的哲学に見られる一層野心的で、また人間にとつて興味深くもある、もろもろの問題を解決するといふ希望を放棄せざるを得なくなる」といふ部分を過度に強調して、ラッセルの全体像を曲解する危険が生じてゐる。

第二の問題、すなはち、「純粹に科学的」な方法によつて得られた認識はかならずしもそのことによつて究極的眞理性を保証されるものではないといふ論点については、ヒュームはとくに論評を加へてゐるわけではない。しかし、「T・E・ヒュームのノートブック」を読むとき、ヒュームは絶対的眞理の存在を前提して立論してゐるのではないかといふ印象を受ける、いひかへれば、方法の客観性がすなはち認

識内容の絶対的眞理性であると短絡して理解してゐるのではないかといふ疑念が生れることがある。⁽⁹⁾ ラッセルは、しかし、「純粹に科学的」な方法をそのやうなものとして提言してはゐない。例へば、「哲学における科学的方法について」のなかで、哲学の命題は、存在する、あるいは存在する可能性のある、あらゆる事物に適用可能でなければならぬといふ意味で、一般性を持つものであるといつてゐるが、その一方で、科学的な哲学の眞理への接近は漸進的であることをつぎのやうに明言してゐる。

私が推奨しようとする科学的な哲学は、他の諸科学同様、各個撃破的で試験的なものとなるであらう。とりわけ、それは仮説を創出する能力を持つものであるが、この仮説は、たとへ十全に眞実ではないとしても、必要な修正が加へられることによつて成果を生むことができるであらう。眞理に対して継続的に接近するといふ、この可能性は、他のなにものにも増して、科学の勝利の源泉をなすものであつて、この可能性を哲学に移植することによつて方法における進歩が保証されることになる。このことのいかに重要であるかは、どれほど力説しても誇張の誇りを受けることはあるまい。⁽¹⁰⁾

同様の趣旨は「神秘主義と論理」のなかにも見られる。

人間にかかはる事柄は、当然ながら、人間の本質を完全に超絶することはできない。われわれの注意の方向を決定する関心にしたところで、主観的なものが、われわれの思考のうちに留つてゐなければならぬ。しかし、科学的な哲学は、人間の行ふ他のいかなる探求にも増して、客観性に接近して、その結果、外部の世界に対して、他では実現不可能なほど密接不可分の関係をわれわれに与へるのである。^四

このやうに、ラッセルにあつては、「科学的な哲学」においても究極的な真理が一举に獲得されるとは考へられてゐないのであり、また、それにもかかはらず、「科学的な哲学」は人間の行ふ探求のなかではもつとも客観性に近づく可能性のあるものと見做されてゐる。ところが、ヒュームにあつては、なんらかの形で認識の究極的真理性あるいは絶対的確實性が獲得されるものとして暗々裡に措定されてゐると思はれるのである。

ヒュームは「純粹に科学的な哲学の本質に関する彼らの所説は申し分のないもの」といつてゐるけれども、客観性については、ラッセルと理解を異にしてゐて、このことが、ヒュームのラッセル批判に歪みを生じさせる遠因になつてゐると思はれる。つまり、「科学的な哲学」が「人間の行ふ他のいかなる探求にも増して、客観性に接近して」ゐるものとすれば、「人間の行ふ探求」のひとつである「世界観」的な哲学に高度の客観性を認めることは不可能であり、さうであれば、

倫理的価値の相対性が唱へられてくるのも論理の必然である。ヒュームの批判が行はれたころのラッセルの所説は、実は、ヒュームに比べて、認識にせよ倫理的価値にせよ、相対性が原理として肯定されてゐるのである。

つぎに検討されねばならないのは、ラッセルの「世界観」的な哲学は内容も文体も陳腐で愚劣であるといふ、ヒュームの論難である。ヒュームのこのやうな批判が行はれたのは一九一五年から一九一六年にかけてであるが、批判の標的にされてゐる「自由人の信仰」をラッセルが雑誌に発表したのは一九〇三年で、十年以上も前のことだつた。この論文を再録して一九一七年に刊行した評論集『神秘主義と論理』の「序」で、ラッセルはこの論文についてかういつてゐる。

理論的な倫理学についていへば、「自由人の信仰」で述べられてゐる立場は、現在の私が採つてゐる立場とまったく同じものではない。現在の私は、執筆当時の私ほどには、善や悪の客観性を確信してゐない。しかし、それでも、この論文で示唆されてゐる生に対する一般的な態度は、大筋において、この緊張と困難の時代にあつても、ドグマ的な宗教的信念を一切、持たない人々が内面的敗北を避けようとするかぎり、選ぶのにふさはしい態度だと私には思はれる。

バートランド・ラッセルが倫理的価値の客観性の主張を撤回するや

うになつたのは、一九一三年ごろサンタヤーナの影響を受けてからだ
とされてゐるが、この「序」において彼は、自分が「善や悪の客観
性」を以前ほど確信しなくなつてゐることをみづから認めてゐるので
ある。しかしまた、それにもかかはらず、「生に対する一般的態度」
としては、ラッセルは一貫して、ここに主張されてゐるやうな思想を
懐きつづけてゐたのだつた。

一九〇一年のケンブリッジ大学の春学期、ラッセルはそのころ寄寓
してゐた数学者ホワイトヘッドの家で、ホワイトヘッド夫人が心臓発
作に苦しむ現場に居合せた。この五分間ほどの間に、ラッセルは宗教
的回心ともいふべき痛切な経験をする。

五分の間に、私はつぎのやうな反省を行つた。人間の魂の孤独は
堪へがたいものである。宗教の教師たちが説いてきたやうな種類
の愛がこのうへなく強烈に燃えさかつてゐるのでなければ、この
魂の孤独に触れることはできない。このやうな深い動機から生れ
てゐないものはすべて有害であり、精々のところでも無用のもの
の域にしか達し得ない。したがつて、戦争は悪であり、パブリッ
ク・スクールの教育は忌はしいものであり、力の行使は非難され
るべきであり、人間関係において人はたがひの孤独の核心に触
れ、その核心に向つて語りかけるべきである、と。¹³

ラッセルはこれにつづいて、「この五分間が過ぎたとき、私はそれ

までとはまったく異つた人間になつてゐた」と記してゐる。このとき
の根源的な経験にもとづいて二年後の一九〇三年に発表されたのが
「自由人の信仰」だつた。それから十数年後の一九一七年、英国が第
一次世界大戦のまつただなかにあるとき、ラッセルは、ここに書かれ
てゐる「生に対する一般的態度」を「ドグマ的な宗教的信念を一切、
持たない人々」に薦めたいと書くほどの自信を持つてゐた。その論文
をヒュームは、「主題について述べてゐるところなどは陳腐きはまり
ないもの」であり、「虚偽と感傷に満ちたレトリックで固めた、辟易
するやうな文章」で書かれてゐて、とてもまともに「検討するだけの
忍耐力」は自分にはない、と酷評したのだつた。

メフィストフェレスが書斎のファウスト博士に天地創造の経緯を語
る場面から始めるこの気宇壮大な論文の主題は、暗黒で無目的、無慈悲
な宇宙にあつて微小な存在に過ぎない人間は、しかし、自己の気高い
理想を掲げ、愛の連帯のなかで、精神の自由を守り抜かねばならな
い、といふものであるが、それがよく窺へる典型的な一節を引用す
る。

真理、美、完全性の理想、これらはひとつとして人生がわれわれ
に達成することを許さないものであり、また意識のない宇宙の承
認も得てはゐないものであるけれども、われわれはこれらに対し
て敬意を持ちつづけようではないか。力はいかにも悪のやうであ
るが、もしさうならば、それをわれわれの心から放逐しようでは

ないか。ここにこそ、人間の真の自由があるのだ。われわれの善に対する愛がつくり出した神だけを崇拜し、われわれの最良の瞬間の洞察力を鼓舞する天だけを尊敬しよう¹⁴と決意したとき、人間は真に自由になるのだ。行動においても欲望においても、われわれは永久に外部のもろもろの力の暴戾に屈伏せざるを得ない。しかし、思考において、志において、われわれは自由になることができる。仲間の人間から自由であり、われわれの肉体が頼りなく這ひまはつてゐるこの小さな惑星から自由であるばかりか、生きてゐる間は死の暴戾からさへも自由なのだ。それゆゑにこそ、われわれをして常に善を視野に納めながら生きることを可能にくれる信念のエネルギーを学ばうではないか。さうして、行動においては、その視野を常にわれわれの前に掲げながら、事実の世界に降りて行かうではないか。

ここにこの論文の趣旨がすべて要約されてゐるわけではないけれども、ヒュームのラッセル批判といふ視点から見ると、重要な論点は十分に含まれてゐるといつてよい。ところで、この一節にも見られるやうに、「自由人の信仰」に顕著な認識のひとつは、無意識の宇宙のなかに置かれた人間の無力を痛感する部分である。ラッセルはまったく言及してはゐないが、ここを読む者はただちに『パンセ』断章七二に見られるパスカルの人間観を連想する。人間が思考において宇宙を超越するといふ思想も、同じく断章三四七に見られる人間認識と軌を

一にしてゐる。ヒュームが「T・E・ヒュームのノートブック」のなかでパスカルの『パンセ』を高く評価し、自分の書かうとしてゐるのは『パンセ』への導入の役割を果すものに過ぎないといつてゐることを考へ合せると、このやうな人間観でヒュームがラッセルを批判しなければならぬ理由は少しもない。しかし、ラッセルはなにによつて人間の存在の条件を克服しようとしてゐるかを見ると、そこにヒュームとしては許しがたい人間の奢りが現れて来るのである。ラッセルは「われわれの善に対する愛がつくり出した神だけを崇拜」するとか、「われわれの最良の瞬間の洞察力を鼓舞する天だけを尊敬」するとかいつてゐるが、これはヒュームとしては断じて容認することのできない人間の倨傲であつた。ヒュームが近代の人間観を激しく批判する視点は、人間が原罪を忘れ、人間に満足を与へてくれるもののみを善とする考へ方を否定するところにあつた。それならば、ここに見られるやうなラッセルの人間観は、ヒュームの近代批判の絶好の対象となる道理である。「ラッセル氏が『自由人の信仰』のなかでこの主題について述べてゐるところなどは陳腐きはまりないもの」と一蹴したときに念頭にあつたのは、このやうなラッセルの人間観であつたと思はれる。

もうひとつ検討しなければならないのは、ラッセルの文体である。冷静で明晰、犀利なラッセルの文体を評価する者には、この『自由人の信仰』の文体は、いかにも気迫がこもつてはゐるものの、精神の著しい昂揚に驚きの眼を睜らざるを得ないはずである。執筆の動機がす

三

で述べたやうな痛切な生と死の体験にあることを知れば、納得も同情もできるが、それにしても、ここに見られる熱気は尋常のものとはいひがたい。例へば、「受動的な自制は叡智のすべてではない」で始る一節⁽¹⁰⁾などはいかにも莊重であるが、しかし美文調の趣もまた感じられるのであつて、美術にも文学にも簡朴で堅固な表現を求めたヒュームにしてみれば、「虚偽と感傷に満ちたレトリックで固めた、辟易するやうな文章」と映つたとしても少しも不思議ではない。そのことは、実は、ラッセル自身、執筆後七〇年近くたつてからつぎのやうに述懐することになる。

(一) 私は一九二〇年ごろから「自由人の信仰」を「美辞麗句とレトリックが多い」と思ふやうになつた。今もさう思つてゐる。

(二) これは、しかし、文体だけの問題である。(三) 現在の私は倫理的価値を、当時いくつかの論文を書いてゐたときのやうに客観的であると思はなくなつてゐる。しかしながら、宇宙と人間の生に対する私の考へは、実質的には変化してゐない⁽¹¹⁾。

いかにもラッセルらしい廉直な自己評価であるが、さうだとすれば、内容が「陳腐」であるか否かはふたりの「世界観」の相違にもとづく、たがひに妥協の許されない評価であるとしても、文体に対するヒュームの批判はラッセルも、少くとも後年にいたつて、認めざるを得なかつたところといふことになる。

ヒュームのラッセル批判は哲学と世界観をめぐつて行はれたばかりでなく、勃発して二年めの第一次世界大戦もまた争点となつた。当時『ケンブリッジ雑誌』の編集を担当してゐたC・K・オグデンの慫慂を受けて、ヒュームは「自由について」以下、七篇の論文を年初からつづけざまに寄稿するのだが、これが掲載の途中からラッセルとの論争に発展する。

バートランド・ラッセルは一九一六年の初め、ロンドンのあるホールで「社会再建のための原理」といふ連続講演を行つてゐた。この講演を何度も聴講したヒュームはラッセルの主張に『ケンブリッジ雑誌』誌上で批判を加へ、それに対してラッセルが二度、反論することになつたのだつた。ラッセルの講演の原稿はその年のうちに出版されるのだが、論争の途中でふたたび兵役についたヒュームはその出版を見ることはなかつただらう⁽¹²⁾。この連続講演の趣旨は、ラッセル自身が刊本『社会再建のための原理』の「序」で明快に述べてゐる。それによれば、人間の生活は意識された目的よりは衝動によつて影響されることが多いが、大部分の衝動は、分有することのできないものをわがものにしようとする所有衝動と、知識や芸術や善意など、個人の所有にはならないが価値あるものを世界に導入しようとする創造的衝動とのふたつに大別され、後者に立つ生活こそ良き生活である。個人の意向に絶大な影響を与へる政治制度は、それゆゑに、所有衝動を抑へて

創造性を促進するものであることが望ましい。国家や戦争や財産は所有衝動の具現したものであり、教育や結婚や宗教は創造的衝動を具現しなければならぬのに、現状では、それはきはめて不十分にしか実現されてゐない、といふ趣旨だつた。本来、第一次世界大戦に反対するのが直接の目的で準備された講演原稿であるが、時事的問題も基本的な人間観や世界観から論評し、当然ながら未来の構想まで示してゐて、ラッセルの特徴のよく出た著作になつてゐる。

この講演をめぐるヒュームのラッセル批判は、纏めれば、つぎの二点で行はれてゐる。ひとつは、現に激戦が展開されてゐる第一次世界大戦に対する評価であり、もうひとつは、そのやうな評価の根柢にある人間観ないしは倫理観である。

まづ、第一次世界大戦に対する評価を比較してみる。ヒュームの第一次世界大戦についての認識は、ヨーロッパが根柢からの流動状態にあり、戦争が終つたときに残される新しい事態は恒久的に、少くとも半世紀は、存続するだらうといふものだつた。その新しい事態とはドイツの恒久的ヘゲモニーであつて、それは「諸国家が構成する社会としてのヨーロッパの終焉」⁽¹⁰⁾を意味するゆゑに、なんとしてでも防がねばならないのである。

ヘゲモニーの可能なことは十分に明白である。しかし、平和主義者はあひかはらず、この（力の）事実がある種の精神の習性の影響のもとで考へてゐて、この習性が彼らにこの事実を過少評価さ

せ、歪曲させるのだ。

平和主義者がこのことを理解するのを妨げてゐる精神の習性とは、なにか。ドイツのヘゲモニーのもとらす結果を説明しても無視してしまふのは、なぜであらうか。おそらくかういふ理由からだらう。つまり、彼らがこれらの主張を割引きして考へるのは、事態が流動的であると、ほんたうには信じてゐないからである。ヨーロッパでなんらかの根柢的な変化が生じる可能性のあることを信じてゐない。例へば、現在の状態から、ひとつの大国のヘゲモニーによつて構成される状態へと変化するかもしれないのだ。彼らは、力の結果として生じた事態はもとに戻せないといふことと、それから、そのやうな根柢的な変化の起り得ることを、心底では信じてゐないので、そのやうな変化を仮定する議論に真剣に対応することができないのである。⁽¹¹⁾

これに対して、ラッセルは『社会再建のための原理』のなかで、たとへドイツの覇権を許してでも世界の平和を確保すべきだといふ立場から論陣を張つた。

今度の戦争がうんざりするほど長引いてくるにつれて、はたして国家の独立はのために支払はれるべき代償に値するものなのかどうかと自問してみた人は多いにちがひない。ひとつの大国に覇権を手に入れさせることによつて普遍的な平和を確保するほうが

よいのではなからうか、と。戦争が始つてから、この二年の間に、従順な平和主義者ならかう考へたことだらう。「世界連邦によつて平和を確保することは、支配する者と人民に微かでも理性の輝きのあることが前提なので、まづたく望めないところである。しかし、ドイツにヨーロッパ中に対して号令をかけさせることによつて平和を確保することは容易であらう。ほかに戦争を終結させる方法はないのであるから、この方法を採用しようではないか。現在のところ、われわれに開かれてゐる方法はこれしかない」平和論者はどういふ犠牲を払つても、かう主張するだらう。この見方は、一般に考へられてゐる以上に傾聴に値するものである。²⁰⁰

ヒュームが講演のこの部分を聴いたかどうか、明らかではないけれども、直接に戦争を取上げた回であつたから、聴講した可能性は大であらうと思はれる。ちなみに、ヒュームはラッセルの「平和主義の哲学」のなかから「守るために闘ふに値する唯一のものは精神にかかはる事柄であるが、かういふ事柄は力の支配は受けないものである」といふ箇所を引用して、批判を加へたこともあつた。²⁰¹ラッセルにとつては外部の騷擾に心を乱されずに精神の価値を守ることが可能と思はれてゐたのである。いづれにせよ、ラッセルのかういふ平和主義が、英國の自由を確保するために主戦論を採るヒュームには、状況の認識も甘く錯誤に満ちた敗北論と映り、まづたく容認できないものであつたことは贅言を要しない。

つぎに、もつと根本的な問題である人間観や倫理の次元における両者の意見の対立が雑誌上で議論の対象になるのは、「われわれが反対する愚劣な考へ」でヒュームがラッセルを名指して批判してからである。当初のヒュームの認識は「倫理的価値が客観的であると見る考へ方において、私はラッセル氏と意見を異にするものではないが、特定の『価値』をそのなかに位置づけるべき尺度ないしは秩序において著しく意見が対立してゐる」といふものであつた。²⁰²それゆゑにヒュームは、ラッセルのいふ「価値」の本質を問ふことになる。

ラッセル氏の講演において、将来の「社会再建のための原理」を確立する際の基礎になつてゐるものは、つねに、まづルソーによつて、ついでロマン派の運動によつて宣揚された諸価値に訴へることであるやうに思はれる。「人格」とか「自然の成長」とかといふ言葉がすべてを決着させるのに十分であるかのやうである。大抵の悪は「成長が阻碍された」結果といふことになる。例へば、敵意は「生の喜びが阻碍された」結果なのだ。この色褪せたルソー主義の根柢にあるのは、人間の本質と価値の眞の階序に関するまづたく誤つた認識である。この階序は客観的なものではなくて、ロマン主義の伝統を無批判に受入れただけの結果に過ぎないのである。²⁰³

また、つぎの週に掲載された論文「なぜわれわれは今度の戦争を支

持するか」では、進歩といふ概念について批判を加へてゐる。

進歩はつぎのやうな意味において「必然的」なものと見做されてゐる。すなはち、世界にあるもろもろの悪は一定の抑圧に起因するものであつて、特定の束縛が除去されればかならず、その束縛が原因となつてゐた悪もまた永久に消滅してしまふ。なぜなら、人間性は全体として善であり、そのことによつて調和ある社会も可能となるから、といふ意味においてである。

これにつづいてヒュームは、このやうな歴史観に立つかぎり、進歩主義者が今度の戦争は闘ふに値しないと考へるのは当然である、といひ切つてゐる。時局にかかはる見解がいかに根柢的な倫理的信念と密接に結びついてゐるかが、また、それだけにヒュームとラッセルの間では妥協の余地のなかつたことがよく窺へる、興味深い一節である。ところで、ここに見られるラッセルに関する認識において、ヒュームに過誤はなかつたであらうか。そのことを、倫理的価値の客観性と、性善説にもとづく進歩主義、この二点について見てみよう。

第一の、倫理的価値の客観性の問題については、ラッセル自身の明白な返答がある。ヒュームの論文「ノース・スタッフス、ラッセル氏の返答に憤慨」に対して書かれ、同じく『ケンブリッジ雑誌』に掲載された「ノース・スタッフス氏の戦争讃美」のなかでラッセルはかう言明してゐる。勿論、ノース・スタッフスは、この一連の論文におけ

るヒュームの筆名である。

ノース・スタッフスが提起しようとしてゐる倫理学の抽象的な問題については、私は確かに、「すべて」倫理は主観的なものであり、したがつて、倫理に関する見解の一致は欲求と衝動に類似があるときにのみ生れる、と主張する者である。いかにも、以前の私はこのやうな見解を採つてはゐなかつたが、論理上の理由や観察から導かれた理由など、数々の理由によつて、このやうに考へるに至つた。オッカムの剃刀（中略）によつて、もし倫理を説明するのになくてもすまされるのであれば、絶対的善といふ考へを放棄してもよいと考へるに至つたのである。

ラッセルがこのころはすでにサンタヤーナの影響で客観的な倫理的価値の存在を否定するやうになつてゐたことを、おそらくヒュームは知らなかつたであらう。それは仕方のないことといつてもよいが、しかし、倫理的価値の主観性に関するヒュームの誤解には、単に他人の個人的な事実を知つてゐたかどうかといふ問題に解消してしまふことのできないところがある。確かに、ラッセルの『社会再建のための原理』の表現には、例へば「個人の成長といふ原理から生じるものを越えて、非個人的なもの、普遍的なものが要請される」といふやうに、倫理的価値の客観性を唱へるかと思はれる箇所も散見されよう。しかし、全体の基調はつぎの線に沿つてゐるのである。

人間性が達成することのできる最上のものを除いては、人間の生において良きものはあり得ない。人類が進歩するにつれて、かつて良きものであつたものが、単により良きものが可能であるといふ理由によつて、良きものでなくなるのである。²⁸⁾

ここで前節に引用された「自由人の信仰」のなかのつぎのやうな言葉を思ひ合せてみると、ラッセルの意のあるところが一層明瞭になる。「われわれの善に対する愛がつくり出した神だけを崇拜し、われわれの最良の瞬間の洞察力を鼓舞する天だけを尊敬しよう」人類は進歩し、その進歩する人類が主となつてつくり出す価値こそが崇拜に値するといふのであれば、倫理的価値の主観性は当然の帰結である。

倫理的価値の客観性についての誤解でもうひとつ黙過できないのは、彼が「T・E・ヒュームのノートブック」で展開してゐる「科学的な哲学」の主張に照してみれば、ラッセルにあつて倫理的価値の客観性が成立しないことは分つてゐなければならなかつたと思はれる点である。これも先に検討したところであるが、「科学的な哲学」が「人間の行ふ他のいかなる探求にも増して、客観性に接近」するものであるれば、「世界に対する態度」に過ぎない「世界観」や倫理的価値などは絶対的な客観性を持ち得るはずはない。ラッセルが倫理的価値の客観性を捨てて主観性を採るやうになつたのもろもろの理由のなかに「論理上の理由」を挙げてゐるのは、おそらくこのことを指してゐるので

はないかと思はれる。

全体として両者の議論を読んで感じられるのは、ヒュームのいふ倫理的価値の客観性が人間からの超越性にあり、したがつて反人間的性格が強いのに對して、ラッセルのいふ客観性は人類のなかでの普遍妥当性にあり、したがつて人間主義的色彩が濃厚であるといふことである。²⁹⁾ラッセルの文章に誤解を招きかねない箇所のあることは事実としても、客観性の概念にこのやうな相違のあることが、ラッセルに対するヒュームの誤解を招いた理由のひとつになつてゐるやうに思はれる。

つぎに性善説にもとづく進歩主義を検討してみる。『社会再建のための原理』の第一章が「成長の原理」といふ標題であるのは象徴的であつて、そこには例へばつぎのやうな見解が見られる。

現代の世界にあつて、大部分の男女に本来備つてゐるはずの成長の原理は、もつと単純であつた時代から継承した制度によつて阻碍されてゐる。思考や知識の進歩によつて、また、物質的世界の諸力に対する支配力の増大によつて、成長の新しい可能性が生れてゐて、新しい要求もまた発生してゐる。このやうな要求をなす人々が阻碍されてはならないのであれば、これらの要求は満足させられねばならないのである。³⁰⁾

ラッセルの立場を選ぶかヒュームの立場を選ぶかはここでは問題に

ならないが、先に引用した「世界にあるもろもろの悪は一定の抑圧に起因するものであつて、特定の束縛が除去されればかならず、その束縛が原因となつてゐた悪もまた永久に消滅してしまふ」といふヒュームのラッセル理解はまことに正しかつたといつてよい。ただ、無条件にヒュームに賛成できないのは、彼のいはゆるラッセルの性善説がラッセルの主張を正確に反映してゐたかどうかといふ点である。例へば、ラッセルは『社会再建のための原理』のなかでかういつてゐる。

戦争が発生する究極的な原因は、人類の多くの部分が調和よりは闘争の衝動を持つてゐて、共通の敵に対して抵抗や攻撃を試みるべきでなければ他者と協力しようとしなまいといふ事実にある。これは諸国家間におけると同様に個人の生活についてもいへることである。(中略)喧嘩や自己主張の衝動、反対を押し切つて自己の主張を通す喜びは、大方の人間にとつて生得のものである。計算された自己の利益といふ動機ではなくて、この衝動こそが、戦争の原因となり、世界国家の招来を困難にしてゐる原因にもなつてゐる。³³⁾

このやうな人間についての認識を読むとき、ラッセルが完全な性善説を奉じてゐたとは思へないのである。彼は、例へば、「あるものが本質的に善であるとか、本質的に悪であるなどと証明できるやうな議

論といふものは、私には想像できない」といつてもゐる。³³⁾しかし、ラッセルは一方で、人間の本質的部分が改変される可能性のあることを信じてゐた。

われわれのなかの本能的な部分は改変できないものであるから、ただ受入れて最善の活用を試みるやうにしなければならぬ、といふ主張は別に珍しくもない。しかし、実態はさうではないのだ。確かにわれわれは、人によつて異なる生得の傾向を持つてゐて、それが外部の環境と協働することによつてある性格をつくりあげる。しかし、われわれの性格の本能的な部分といへども、大きな可鍛性がある。それは信念によつて、物質的環境によつて、社会的環境によつて、制度によつて、変へられる可能性があるのである。³⁴⁾

このやうな見解が、人間の本质は不変であつて原罪を刻印されてゐるといふ人間観を持つヒュームにとつて、まったく容認することのできないものであつたことは明らかである。ラッセルの性善説は、人間のなかに悪への傾向を認めながらも、それに対抗する良き衝動を喚起することによつて克服できると考へるのであり、絶望して超越的な価値に帰依するしか救ひのないヒュームの悲愴な人間観に比べれば、遙かに楽観的であつた。

二人の論争は、結局、共通の理解に達することはなかつた。ヒュー

ムはまだまだ論争を挑み、自分の見解の正当であることを主張しつづけるつもりであつたが、しかし、ラッセルには、この論争は決着のつかないことが分つてゐた。彼は二度めの返答をかう結んでゐる。

私としては、この世界に残虐や迫害、懲罰、道徳的非難が現在よりも少くなつてもらひたいと思つてゐる。倫理の主観性を承認することはこの目的のために寄与するところがあらうと私は信じてゐる。しかし、もしノース・スタッフス氏がかういふものが気に入つてゐて、それらはそれ自体において善であると判断されるのであれば、その考へが間違ひであると論証することは、私にはできない。彼の欲求と私の欲求はたがひに異なるとしか、私にはいひやうがない。もし戦争は本質的に素晴らしいものであるといふ信念になにかほかの根拠があるのであれば、ぜひそれを明らかにしてもらひたいものである。³⁵⁾

いはゆる哲学のなかの「純粹に科学的な」要素と「世界観」的な要素とを分離した考へ方の到達した地点がここであつた。倫理的価値の客観性を唱道するヒュームと、その主観性を信じるやうになつたラッセルの間で、議論はこれ以上に進みやうはなかつた。さうしてまた、『ケンブリッジ雑誌』一九一六年三月四日号に「この抽象的な問題での相違が現実はどういふ結果をもたらすか、それは来週、論じてみたい」と書いたヒュームも、その直後に砲兵隊の士官として再度従軍

し、二度と見解を文字にして世に問ふことはなかつた。

四

バートランド・ラッセルの『自叙伝』の第一次世界大戦の章には T・S・エリオットや D・H・ロレンスとの交際の模様が書き留められてゐるのに、T・E・ヒュームとの応酬についてはまったく記述がない。記述がないといふ事実にはアラン・ライアンも言及してゐるが、ラッセルがなぜヒュームとの論争に一言も触れなかつたのかについては、一切の推測を慎んでゐる。もしラッセルがこれを『自叙伝』に記録するに値しない小さな挿話だと考へてゐたとしても、それがさうでないことは、ライアンがラッセル研究書で両者の論争にかなりのページを割いてゐることが証明してゐる。³⁶⁾ 事実、ラッセル自身、迷ひに陥ることはあつたものの、「いざ大戦が始ると、私は神の声を聞いたやうな気がした。たとへ抗議が不毛であつても、抗議することが自分の務めだと思つた。私の全存在がかかはることだつた」といつてゐるし、一方のヒュームは、敗北してドイツの覇権を許せば英国の自由が壊滅するといふ認識に立つてゐた。この両者の対決が瑣末な論争だつたとは思へない。当然、T・E・ヒュームに関心のある者には見逃せない、ヒュームの生涯の事実なのである。

「戦闘的な平和主義者」³⁷⁾で、討論すると相手を撃破してしまふのが常であつたラッセルが、わづかに二度の応酬に過ぎなかつたとはいへ、このヒュームとの論争では珍しく「抑制が利いてゐて、静かな口

調で道理を述べてゐる」⁽³⁹⁾と人を驚かせてゐる。

実際に戦争に従軍し、わづか十メートルしか離れてゐないところで戦友の頭が砲弾で吹き飛ばされるのを見、自らも負傷して、治療を受けるために母国に帰還してゐたヒュームとしては、「思考する能力と人々の必要に応じて考へるだけの想像力を持つてゐる者は、遅かれ早かれ、その目的とする善を実現できるだらう。おそらく生きてゐるうちには無理だとしても」⁽⁴⁰⁾と悠長な講演をするラッセルは許しがたい存在であつたらう。しかし、単なる非難や攻撃に終らず、「T・E・ヒュームのノートブック」に見られるやうに、哲学の基本的な問題は問題として、従軍の合間を縫つて思索を進めてゐるヒュームの姿は、われわれにも感動的である。「徴兵・反対同盟」の活潑なメンバーとして反戦活動を展開してゐたラッセルも、相手の置かれてゐる状況が分つてゐるだけに、反駁の筆鋒も鈍つたと見るのは、激しい時代の状況に無縁なわれわれの感傷だらうか。

バートランド・ラッセルは一九一六年七月十一日、反戦活動がもとでケンブリッジ大学の数理哲学講師の職を解かれ、一九一八年五月には禁固六ヶ月の判決を受けて、ブリクストン監獄に「囚人二九一七号」として収容された。

T・E・ヒュームは一九一七年九月二八日、オースト・デュンケルケ・バインズで作戦中、砲撃を受けて戦死した。三十四歳だつた。

注(1) 第一次世界大戦を扱つたヒュームの時評には、『新時代』誌に載つたものと『ケン

ブリッジ雑誌』に載つたものと、ふたつの系列があるといふが、本稿は *Further Speculations*, ed. Sam Hynes (University of Nebraska Press, 1955) 所載の後者によつてゐる。

(2) アラン・ウッド(碧海純一訳)『バートランド・ラッセル——情熱の懐疑家——』(木鐸社 一九七八年) 六六頁。

(3) G. H. Hardy, *Bertrand Russell and Trinity* (Cambridge University Press, 1970), p. 26.

(4) T. E. Hulme, *Speculations*, ed. Herbert Read (Routledge & Kegan Paul, 1924), p. 28. なお、このなかの三つの引用に対応する箇所はつぎのとおりである。^① Bertrand Russell, *Mysticism and Logic* (1917; Unwin Paperbacks, 1986), pp. 97, 107, 120.

(5) *Ibid.*, p. 29.

(6) *Ibid.*, p. 29.

(7) Bertrand Russell, *Mysticism and Logic*, p. 107.

(8) *Ibid.*, p. 29.

(9) T・E・ヒュームは例の「実在三分説」で、生物学や心理学や歴史のやうな「厳密さを欠く」科学の対象となる生命の領域とは異り、数学や物理学の対象となる無機的世界と倫理的・宗教的価値の世界は絶対的性格を持つてゐて、それらに関する知識は「絶対的知識」であると称してゐる。彼は幾何学の場合と同じタイプの合理的・非経験論的推論による知識の可能性を認めてゐる。 Cf. T. E. Hulme, *op. cit.*, pp. 6 and 41-2.

(10) Bertrand Russell, *op. cit.*, p. 110.

(11) *Ibid.*, p. 48.

(12) アラン・ウッド、前掲書、一四六頁。

(13) Bertrand Russell, *Autobiography* (1967-9; Unwin Paperbacks, 1978), p. 149.

(14) Bertrand Russell, *Mysticism and Logic*, p. 13.

(15) *Ibid.*, pp. 14-5.

(16) Quoted in *The Collected Papers of Bertrand Russell*, Vol. 12 (George Allen & Unwin, 1985), p. 64.

(17) A. R. Jones, *The Life and Opinions of Thomas Ernest Hulme* (Victor Gollancz, 1960), p. 139. なお、ヒュームが「何度も」聴講したとは書

らであるが、この回を聴講したかは述べられてゐない。しかし、ヒュームの七編の論文を参照するに、ラッセル講演の趣旨は承知してゐたと見られる。

- ⁶⁰ T. E. Hulme, *Further Speculations*, p. 171.
- ⁶¹ *Ibid.*, p. 191.
- ⁶² Bertrand Russell, *Principles of Social Reconstruction* (1916; Unwin Paperbacks, 1980), p. 69.
- ⁶³ T. E. Hulme, *op. cit.*, p. 175.
- ⁶⁴ Cf. Bertrand Russell, *op. cit.*, pp. 168-9.
- ⁶⁵ T. E. Hulme, *op. cit.*, pp. 180-1.
- ⁶⁶ *Ibid.*, p. 181.
- ⁶⁷ *Ibid.*, p. 184.
- ⁶⁸ Bertrand Russell, "North Staffs' Praise of War," T. E. Hulme, *op. cit.*, pp. 211-2.
- ⁶⁹ Bertrand Russell, *Principles of Social Reconstruction*, p. 150.
- ⁷⁰ *Ibid.*, p. 151.
- ⁷¹ ラッセルが『社会再建のための原理』のなかで主張してゐる要点のひとつは、創造的自由の重要性である。例へば、正しい行動の指針は、当事者の成長や生命力の発現をできるだけ促進し、他者の犠牲をできるだけ削減してゐるかどうかで価値判断されるべきで、この尺度は個人にも地域社会にも国家にも国際関係にも適用されるべきで、人間の創造的自由があらゆるレベルで倫理的価値となつてゐる。
- ⁷² Cf. Bertrand Russell, *op. cit.*, p. 155ff.
- ⁷³ 例へば、ラッセルは「主戦派は衝動に動かされ、平和主義者は理性に動かされるものと考へてゐる」やうに L. E. ヒュームが理解してゐるといつて、その誤解を解かうとしてゐるが、講演のなかでつぎのやうにいつたりしてゐる。"But unless our standards of civilization and our powers of constructive thought are to be permanently lowered, I cannot doubt that, sooner or later, reason will conquer the blind impulses which now lead nations to war." (Bertrand Russell, *op. cit.*, p. 62) ラッセルが一般向けの文章を書くときになじみが見せる、言葉の曖昧な、融通の利いた使ひ方の一例であらう。
- ⁷⁴ Bertrand Russell, *op. cit.*, p. 20.
- ⁷⁵ *Ibid.*, p. 75.
- ⁷⁶ Bertrand Russell, "North Staffs' Praise of War," T. E. Hulme, *op. cit.*, p. 212.
- ⁷⁷ Bertrand Russell, *Principles of Social Reconstruction*, p. 29.
- ⁷⁸ Bertrand Russell, "North Staffs' Praise of War," T. E. Hulme, *op. cit.*, p. 212.
- ⁷⁹ Alan Ryan, *Bertrand Russell, A Political Life* (1988; Penguin Books, 1990), pp. 69-72.
- ⁸⁰ Bertrand Russell, *Autobiography*, p. 240.
- ⁸¹ Andrew Brink, *Bertrand Russell, The Psychobiography of a Moral-ist* (Humanities Press International, 1989), p. 115.
- ⁸² A. R. Jones, *op. cit.*, p. 139.
- ⁸³ Bertrand Russell, *Principles of Social Reconstruction*, p. 156.